

# 岐阜県美術館 研究紀要 09

研究ノート

ジョルジュ・デヴァリエール

《ミサを捧げる司祭》の来歴について

松岡 未紗

事例報告

「陶の標－山田光」展 対談 山田光×宮永東山  
～戦後・京都の工芸を語る～

正村 美里

## ジョルジュ・デヴァリエール《ミサを捧げる司祭》の来歴について

岐阜県美術館 学芸員 松岡 未紗

### はじめに

ジョルジュ・デヴァリエール (1861-1950) は、19世紀末から20世紀半ばにかけて活動したフランスの画家である。サロン・ドートンヌの創設者の一人としてフォーヴィスム、キュビズム、装飾芸術を擁護した。その一方で、聖画塾(アトリエ・ダール・サクレ)を設立し、モーリス・ドニとともに20世紀フランスにおける宗教絵画の復興者として、宗教美術に新たな息吹を吹き込んだ。岐阜県美術館は、オディロン・ルドン周辺のフランスの作家として、ギュスターヴ・モローからの影響がみられるデヴァリエールの初期作品《アフロディテ》(1899年、油彩)を所蔵しており<sup>i</sup>、2020年に《ミサを捧げる司祭》が寄託された(fig.1)。同作は、緑と茶色を基調色とした大胆なストロークによって、聖杯を持つ聖職者の姿が具体的に捉えられた油彩画である。

本稿では、寄託を受ける際に所蔵者と話題とした作品の来歴について考察する。



fig.1

### 1. 作品基本情報

- 作者 ジョルジュ・デヴァリエール (George Desvallières)  
作品名 ミサを捧げる司祭 (原題: Prêtre célébrant la messe)  
制作年 1903~05年頃 ※当館への寄託にあたって調査した折に筆者が推定  
素材技法 油彩、厚紙  
寸法 105.0×72.5cm  
署名 画面右下「G. Desvallières.」  
保管状態 額装

### 2. 作品状態調査

本作品は厚紙に油絵具で描かれている。過去に修復歴があり、画面には穴、ヤブレ、変形等の損傷を修復し、補彩及び保護ワニスが施されている。また、変形修正のための格子に組まれた木パネルで裏打ちされている。裏打ちと表面の処置が同時期であるかどうかは不明である。パネルには作家名及び作品名を記載した、周囲を切断したラベルが貼られており、現在の作品名はこれに基づいていることがわかる。作品の額縁は日本製であり、制作当初のものではない。

### 3. 類例作品調査

作品に用いられた素材技法及び表現等から、デヴァリエールの画風の変遷を追い、制作年代の推定を行ったところ、1904年頃を中心に類例作品をいくつか確認した。

デヴァリエールは1903年から1904年にかけて、ロンドンやパリの歓楽街で、夜遊びをする者たちの悲惨さや、キャバレーの虚飾的な華やかさを描くことに専心していた。先ず現地で鉛筆による素描を制作し、小下絵を描いた後、大型作品を制作した。こうして制作された作品はカタログレゾネに17点が掲載されており<sup>ii</sup>、共通して約105×75cmの厚紙を支持体を選択し、油絵具で描かれている。1904年はデヴァリエールがキリスト教信仰へ回帰していく時期でもあり、これらの作品は都市の夜を過ごす人々を題材としたものと、教会における宗教的体験を題材としたものに大別できる。ただし題材や表現に共通点

はあるが、展覧会等で一堂に発表された記録は現時点では見つかっておらず、そのうちの何点かがサロン・ドートンヌやサロン・デ・ザンデパンダンに出品されたことが確認できる<sup>iii</sup>。

デヴァリエールは、その一方で、早朝にはノートルダム・デ・ヴィクトワール教会（パリ）へ絵を描きに行き、そこで出会った人々の熱意に感銘を受けたり、聖体拝領の様子を目にしたりしていた。「…ここでは、聖体拝領の瞬間を照らすろうそくの光がその神秘性を浮かび上がらせています。私がスケッチし、研究していた司祭たちもいました。とりわけ、聖体拝領の際に、信仰の情熱にあふれた様子で聖体を掲げた、ある若い司祭のことを今でも覚えています。私はその姿に深く感動しました…」(筆者訳)と1934年に当時の心境を回顧している<sup>iv</sup>。

おそらく本作品はノートルダム・デ・ヴィクトワール教会での経験を題材としており、1903年から1905年にかけて制作された作品は、同寸で且つよく似た色の選択と大胆な筆致による表現様式で制作されていることから、これらの作品群のうちの1点である可能性が高い。関連作品のうち、《大きな帽子、アルハンブラ》<sup>v</sup>、《ボストン》<sup>vi</sup>についても同様に格子パネルによる裏打ちが施されており、本作品との修復歴上の共通点がある。

以上のことから、カタログレゾネ著者のCatherine Ambroselli de Bayser氏ならびにPriscilla Hornus氏に確認したところ、本作品はこれらの関連作であることが判明した。彼らによれば、カタログレゾネ発行後に、本作品のように関連作情報が寄せられ、2015年発行当初には17点の連作としていたが、現在は約20点の連作とされているようである。

なおカタログレゾネには、本作品のエスキースと思われる作品が掲載されている<sup>vii</sup> (fig.2)。また、アルフレッド・ド・ミュッセ著『ローラ』(A. ロマニョール出版社、リブレイ・ド・ラ・コレクション・デ・ディ、パリ、1906年刊行。300部限定、印刷時に番号入)の挿絵制作にあたっては、その中で本作品の図像を用いている<sup>viii</sup> (fig.3、原画は現存していない)。

#### 4. 日本における紹介

日本で紹介された早い時期の情報として、1943(昭和18)年発行の『旬刊』美術新報』に画像掲載を確認できる (fig. 4) <sup>ix</sup>。本誌によれば、この作品は三井コレクションのうちの1点として、《瀾撒》の名で紹介されていた。作品を観た「K」という者は「感心したのはデヴァリエールである。この半描きで仕上げたやうな作品の色調の深さと鋭さ、線の動きの遅しさにやはり頭を下げた。この藝當が日本の作家にまだ出来ない藝當だと思ふ。」と記している<sup>x</sup>。

三井コレクションは江戸時代より三井家が収集してきた美術工芸品で、茶道具から絵画、書跡、刀剣、能面等多岐にわたる。ここに示された三井コレクション(また三井洋画コレクションの表記もある)は、室町十一代で実業家の三井高精(宗精/1881-1970)が築いたコレクションである。ロンドン留学以来の知人で洋画家の白瀧幾之助の助言を得ながら、大正末年頃から国内外の洋画を収集した<sup>xi</sup>。収集作品は以下のようなものがある<sup>xii</sup>。

##### 【主な外国人作家】

コンスタンタン・ギース《闘牛士》、ウィリアム・オーチャードソン《ささやき》、アドルフ・ジョゼフ・トマ・モンティセリ《公園の婦人》、カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》《ルコント夫人》《樹蔭の道》、ポール・シニャック《風景》、エミール・ベルナル《静物》《プルターニユの景》、ダンテ・ガブリエル・ロッセッティ《眠る女》、ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《海辺に立つ女》、ウジェーヌ・ドラクロワ《四人の兵士》《男》、アマン・ジャン《二人の女》、ウジェーヌ・ブーダン《海辺》、シャルル・コッテ《海の犠牲》、ピエール・ボナール《桃》、カミーユ・ピサロ《春》、アン



fig.2



fig.3



fig.4

リ・マティス《女》、ラファエル・コラン《婦人肖像》《草上の女》《女の顔》《瞑想》、クロード・モネ《断崖》、ウジェーヌ・カリエール《少女の顔》、ヴァン・ダイク《肖像》、マルク・シャガール《顔》、他

#### 【主な日本人作家】

坂本繁二郎《ヴァンヌ風景》、黒田清輝《草つみの女》《庭の菊》《月夜》、岸田劉生《風景》、山本芳翠《少女》、浅井忠《ヴェニス》、藤島武二《鏡台前の女》《裸婦》、安井曾太郎《洛北風景》、梅原龍三郎《静浦》、小磯良平《踊り子》、岡田謙三《本》、佐伯祐三《雪景色》《オスニーの寺》、他

三井高精は松方コレクション及び林忠正旧蔵品の売立やエルマン・デルスニスが開催した仏蘭西現代美術展等から作品を収集した<sup>xiii</sup>とされているが、松方<sup>xiv</sup>・林旧蔵<sup>xv</sup>作品には本作品は含まれていなかった。デルスニスは1922年から37年まで、仏蘭西現代美術展をはじめとする各種展覧会を開催し、絵画だけでも約4,000点が将来している<sup>xvi</sup>。その中にはデヴァリエールの作品もいくつか含まれているようであるため、今後調査が必要である。

三井洋画コレクションは1941（昭和16）年頃から麴町区平河町邸敷地内にて定期的に無料公開されていた<sup>xvii</sup>が、第二次世界大戦激化のため、1944（昭和19）年に展示室を閉鎖した。戦後展観が再開されることはなく、徐々に売却等が進められ、現在は散逸し、個人蔵のほか、アーティゾン美術館や国立西洋美術館、横浜美術館、三重県立美術館等の国内美術館に収蔵されている。本作品は『「旬刊」美術新報』の記事では「今日の展観は…」という前置きに続いて作品評があることから、1943（昭和18）年2月頃に開催された三井洋画コレクション展に出品されていたのではと考えられる<sup>xviii</sup>。

## おわりに

作品の来歴をたどるにあたり、制作年代と日本での紹介に焦点を当てて調査を行った結果、デヴァリエールにとって転換期にあたるわずかな期間に制作された重要な作品の1点であり、また日本では著名な蒐集家旧蔵作品として、戦前に国内に持ち込まれていた作品であることが徐々に明らかとなってきた。主題中にある永遠性に触れた時の揺れ動く感情に苛まれる心の在り様を、繊細かつ大胆な筆致によって描いた本作品を、今後も調査を継続することで、制作背景とその後の日本における受容の一例としてさらに迫ることができれば幸いである。

- 
- i ジョルジュ・デヴァリエール《アフロディテ》1899年作 油彩、板 41.0×22.5cm、Inv. P1995-012。カタルグレブネでは*Flore triomphante*の題名で掲載 (CR644)。
- ii Catherine Ambroselli de Bayser, Priscilla Hornus, Thomas Leques, *George Desvallières Catalogue raisonné de l'œuvre complet*, Somogy éditions d'art, Paris, 2015. CR 882,890,896,913,915,970,979(裏面960) ,1009,1024, 1034,1049,1051,1052,1053,1060,1061
- iii 一連の作品の初出展覧会は主に1904年開催のサロン・ドートンヌ (CR890,915,1034 [?] ,1049) と1905年開催のサロン・デ・ザンデパンダン (CR1024 [?] ,1051,1053) 。これらに出品された作品にはサインが入っている。
- iv Ambroselli de Bayser et al.,op.cit., p.236
- v *Le Grand Chapeau*, Alhambra, CR890
- vi *Le Boston*, CR915
- vii *Le Calice du moine, esquisse,1905*, CR1113
- viii *Le Calice du moine,1906*, CR1136
- ix 『旬刊』美術新報』第52号、日本美術新報社1943年2月、pp.6-7、17
- x 前掲書、p.17
- xi 『三井家文化人名録』財団法人三井文庫編・発行、2002年、pp.123-124
- xii 『旬刊』美術新報』第13号、日本美術新報社1942年1月;第22号、1942年4月;第40号、1942年10月;第74号、1943年10月
- xiii 『特集展示 西洋美術に魅せられた15人のコレクターたち 1890-1940』石橋財団ブリヂストン美術館、1997年、pp.56-58
- xiv 神戸市立博物館編『松方コレクション西洋美術総目録』『松方コレクション展』実行委員会/神戸市立博物館、1990年
- xv 長崎周蔵『林忠正収集西洋画図録』1908年
- xvi 中川三千代『エルマン・デルスニスによる両大戦間における日本での展覧会活動』『文化資源学』第16号、2018
- xvii 三井邸で開催された主な展覧会は以下のとおり。  
 三井洋画コレクション第2回陳列 1941 (昭和16) 年3月15日～9月12日  
 三井コレクション第3回陳列 1941 (昭和16) 年9月13日～12月20日  
 三井コレクション第4回陳列 1942 (昭和17) 年1月10日～3月28日  
 三井洋画コレクション第5回陳列 1942 (昭和17) 年4月4日～6月27日  
 三井洋画コレクション第6回陳列 1942 (昭和17) 年7月4日～10月31日  
 第7回三井コレクション陳列 1942 (昭和17) 年11月7日～1943 (昭和18) 年1月30日  
 三井コレクション展覧 (陳列がえ) 1943 (昭和18) 年5月1日より毎土曜  
 三井洋画コレクション第9回陳列 1943 (昭和18) 年6月?～7月31日まで  
 三井洋画コレクション欧州絵画特別展覧 1943 (昭和18) 年9月11日、12日、18日、19日、25日、26日  
 三井洋画コレクション陳列替 1944 (昭和19) 年1月9日～  
 ※上記展覧会名・会期は『旬刊』美術新報』第62号、日本美術新報社、1943年6月 (広告頁)、同 第71号、日本美術新報社、1943年9月 (広告頁)、『日本美術年鑑 昭和17年版』美術研究所、1943年、pp.17、46-47、『日本美術年鑑 昭和18年版』美術研究所、1947年、pp.10、22、37、66、『日本美術年鑑 昭和19・20・21年』国立博物館、1949年、pp.23、37、60に基づく。
- xviii 「…今日の展覧は外国作品で9点、模写1点、複製版画3点であり、日本作家の作品は新舊十点といふところである。…」とあり、第7回展(1942年11月7日～1943年1月30日)出品目録と記事の内容が一致しない。現時点で情報に乏しい第8回展への出品の可能性が高いか。

\*本調査にあたり作品ご所蔵者様、三井文庫様、三越伊勢丹ホールディングス様、Catherine Ambroselli de Bayser様ならびにPriscilla Hornus様にご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。